

松本丘著

『垂加神道の人々と日本書紀』

高橋 美由紀

本書は垂加神道史上の人物研究に精力的に取り組み、垂加神道研究に新生面を開いてきた松本丘氏の待望の論文集である。氏は、本書の跋文に記されているように、國學院大学での卒業論文以来、一貫して垂加神道を研究対象とし数々の注目すべき成果を学界に示してきた。その研究法は、国内に残されている垂加神道史料を博搜し、その内容について精緻な分析を加えた上で、近世における垂加神道の形成と発展の諸相を実証的に明らかにしようとするものである。

一

本書は、第一編の「垂加神道の諸家」と、第二編の「垂加神道と『日本書紀』」から成る。第一編では、冒頭第一

章の垂加神道概説において、研究史を踏まえながら垂加神道の流れを概観することにより、改めて近世社会における垂加神道の広がり大きさとその多様性を指摘する。以下の各章では、まず、闇斎没後の垂加神道の継承に大きな役割を果たした闇斎直門の神道家、浅井琳庵と守井左京の存在に着目し、これまで明らかにされなかった初期の垂加神道界の動向を解明する。次に、垂加神道を大成したとされる玉木葦齋を取り上げ、これまで不明な点の多かった彼の伝記的事実について新たな事実を指摘するとともに、不明瞭な点の多かった橋家神道の形成過程および垂加神道との関係について史料に即しつつ検討を加えている。最後に、垂加神道の個別神社への影響の例として祇園社の祠官山本家と社僧松坊における垂加神道受容の様子を具体的に明らかにし、近世の神社と垂加神道との関係を示す事例として提示している。

第二編では、一連の主要な垂加神道家による『日本書紀』研究書を取り上げ、その内容とそれぞれの神道思想との関連について詳細な検討を加え、従来、比較的等閑視されてきた垂加神道家の『日本書紀』研究の実態と特色を明らかにしている。まず、第一章「垂加神道に於ける『日本書紀』研究」において、垂加神道家の『日本書紀』とりわけ神代巻の注釈や解釈の特色と意義を総括している。その

特色は日本の「道」の書として、すなわち日本人の学問・修養の教への書として神代巻を解釈することであり、そこに垂加派独特の皇統守護の尊神としての素戔嗚尊・大己貴神観が生み出される所以もあるとする。他方で、垂加派の神代巻解釈には早い時期から古語や和訓への強い関心が芽生えており、契沖の業績への着目が見られことを指摘し、このような実証的研究への指向性が谷川士清の業績として結実したとする。以下の各章では、谷秦山の『神代巻塩土伝』、若林強斎の講義、山本復斎の『神代紀鈔説』、玉木葦斎の『神代巻藻塩草』、竹内式部の『日本書紀第一講義』、谷川士清の『日本書紀通證』等の垂加派による主要な『日本書紀』の注釈書や講義録を取り上げ、その成立事情と内容について、順次、詳細な検討を行っている。

二

戦後の垂加神道研究は、時代のイデオロギー的状况を反映してしばらく低調な時期がつづいたが、昭和四〇年代以降、平重道博士・近藤啓吾博士・谷省吾博士等による著書や論文の発表が相継ぎ、新史料の発掘や紹介がなされるようになった。しかし、主たる研究の担い手は近藤氏や谷氏を中心であり、活況を呈するというにはほど遠い状況であった。

しかるに、年号が昭和から平成に代わる頃から、若手研究者が垂加神道の研究に取り組むようになり、次第に研究が活発化してきつつある。その背景には、二つの面があるように思われる。一つは江戸文化への関心の高まりと再評価の動きである。従来の政治・経済中心の江戸時代研究から広くその時代を生きていた人々の生活スタイルや社会の有り様などの文化のあり方への関心が高まった。そのような時代背景のもと、近世の社会史や文化史の研究が活性化するのに伴い、従来、等閑視されてきた宗教者や神社寺院の実態解明にも目が向けられるようになった。もう一つは思想史研究の進展である。それまでの日本思想史研究は、研究者の数も少なく、必然的に研究状況も低調であったが、この頃から日本史研究者をはじめ倫理学、宗教学、中国哲学、国文学など関連分野からの研究者の参入が相継ぎ、研究内容も広くかつ精密になってきた。以上のような研究動向の変化とともに垂加神道が注目されることは、ある意味で当然のことでもあった。何と言っても江戸時代の文化や思想の流れの中で垂加神道や崎門学派が大きな光芒を放っていることは否定できない事実であり、そのことが江戸時代の儒教や国学研究の深化に伴って明確にあぶり出されてきたからである。

近年の垂加神道の研究動向を端的に示すのが、平成十二

年(二〇〇〇)に開催された日本思想史学会におけるパネ
ルセッション「垂加神道と国学」であろう。ここでは、遠
藤潤氏による「垂加神道と国学——先行研究と論点の所在
——」、前田勉氏による「近世における天皇權威の浮上の
理由」、西岡和彦氏による「出雲大社に於ける垂加神道と
国学の共生」、小林准士氏の「知の普及と地域社会」の四
人の報告が行われた(詳細は『日本思想史学』三三号に掲載)。
このパネルセッションからも分かるように、垂加神道を国
学同様、近世における大きな思想運動と捉え、その様態を
解明するという方向で新たな研究が展開しつつあるとみる
ことができる。それはまさしく近世社会における垂加神道
および専門学の存在実態に即応したものであり、垂加神道
研究の深まりを示すとともに、その本格的な研究の道がよ
うやく開かれつつあることを示すものでもある。

従来の垂加神道や専門学の研究は、どちらかと言えば閼
斎その人の思想の解明や、その学統を継ぐ著名な思想家の
学説の検討にとどまっていた。だが、江戸時代における垂
加神道や専門学の思想的影響や社会的広がりの大きさは、
そのような頂点的思想家の研究のみで捉えきれないことは
明らかである。垂加神道の形成と展開を思想運動という観
点から捉え直す新たな研究がようやくはじめられつつある
と言えよう。そして、この新しい垂加神道研究の一翼を

担っている一人が、本書の著者松本丘氏である。

三

本書に収められた氏の研究のなかで、注目すべき点を具
体的に述べてみたい。まず、第一点は、閼斎直門の浅井琳
庵と守井左京の活動を解明することによって、垂加神道形
成期における思想展開の様相が具体的に明らかにされたこ
とである。従来の研究では、閼斎一人に焦点が絞られがち
だったことや、閼斎没後の展開についても閼斎—公通—葦
斎の流れを中心に研究が行われ、この本流から外れた直門
の弟子達の研究はほとんどなされて来なかった。そのため
垂加神道の形成過程が見えにくくなって思想展開のダイナ
ミズムが見失われてきた。氏の研究はこの研究史上の空白
域を埋めるものであり、高く評価すべきものである。特に、
琳庵の研究によって、玉木葦斎による秘伝の整備と固定化
が進められる前までは、直門による秘伝についての自由闊
達な「発明」の応酬が存在したことを指摘した点や、守井
左京について、『古語拾遺』版本や『神道名目類聚抄』の
刊行という神道啓蒙家としての業績と、葦斎以前の秘伝形
成への関与を初めて指摘し、閼斎直門の神道家の活動の重
要性を指摘した点は、今後の垂加神道研究に重要な意味を
持つものである。

注目すべき第二の点は、氏による玉木葦斎の研究によって、垂加神道と深い関わりを持つ橘家神道の実態がかなり明らかになったことである。とりわけ、これまで不明であった葦斎以前の橘家神道について、この面での葦斎の師とされる薄田以貞時代にすでに橘家神道の諸伝の集成がなされるとともに、以貞自身も垂加神道を学び、その教えを橘家神道に取り込もうとしていたこと、葦斎はこの薄田家の傍流に位置し、橘家神道の行法面を垂加神道に取り入れることで秘伝の整備を行う傍ら、垂加神道の思想を橘家神道に取り入れて中世的な儀礼中心の橘家神道の近世化を図ったこと、等を史料に即して具体的に指摘し、葦斎の本質はむしろ橘家神道家にありとの注目すべき評価を下している。今後の葦斎研究の大きな課題が示されたと言えよう。

第三は、垂加神道家による『日本書紀』とりわけ神代巻の注釈や講義についての研究の重要性を指摘したことである。垂加神道の秘伝の多くが神代巻に基づくものであることは周知のことであるが、にもかかわらず両者の関係についての研究はこれまで手薄であった。氏は、歴代の垂加神道家の注釈や講義を精読分析することによって、その内容の検討が思想面での垂加神道の展開を説明する上で欠かせないことを示している。例えば、垂加神道における神代巻注釈書の代表格とも言える玉木葦斎の『神代巻藻塩草』に

ついて、その成立事情を丹念に追いかけることにより、本書が垂加派注釈書の集成としての性格を持つこと、先行する注釈として守井左京の手になる『藻塩草』の存在があり、その影響を受けていること、橘家神道の神代巻解釈をも取り込んでいること、等の重要な指摘がなされている。また、谷秦山の『神代巻塩土伝』については、素戔嗚尊の「解除」を修養の道を示した教えとして読み解く垂加神道独自の思想が、本書によって確立されたことを明らかにしている。さらに、垂加神道の『日本書紀』研究の白眉とされる谷川士清の『日本書紀通證』に先行する重要な注釈書として山本復斎の手になる『神代紀鈔説』を紹介し、垂加神道の『日本書紀』研究史の空白を補うとともに、知られざる篤学の神道家山本復斎の存在を明らかにしたことも注目すべき成果と見ることができると言える。

松本氏の研究は、史料の発掘精査と丹念な読みによるきわめて実証的なものである。その眼差しは、これまでの垂加神道研究の手股から漏れてきた神道家を発掘することによって、垂加神道の本流のほかに様々な支流があり、その両者がダイナミックに関わりあいながら大きな垂加神道の流れを形成していたことを、具体的に我々の前に明らかにしてくれた。先にも述べたように、垂加神道や崎門学は近世における巨大な思想運動であり、その運動全体の説明は、

氏が試みてこられたような神道家一人一人の事績の発掘と検証なしには不可能である。その意味で、本書は将来構築されるであろう近世における思想運動史としての垂加神道史完成への重要な一里塚になるものと確信する。

もちろん、本書の内容について不満がないわけではない。特に、第二編における『日本書紀』研究の流れを辿る上で、その成立事情や他の注釈書や講義録との関連という実証的な面は別として、個々の注釈書や講義録の思想内容の分析が、各論間でばらつきはあるものの全体として不十分であり、かつやや形式的との感は否めない。今後、現在の実証的研究を一層進展させるとともに、思想史的側面の研究を深化させ、事績と思想分析を統合した「垂加神道史」を大成されることを心より期待したい。

(東北福祉大学教授)